2024.5.9 第2回霊的講話 「松沢校長はどんな人物か①」

生徒の皆さん、お早うございます。前回の霊的講話から3週間が経っていますから、「霊的講話って何だったかな?」と思っている人もいるかもしれませんね。

さて、第二回目の今日は、この霊的講話をしている松沢校長とはどのような人間かを、自己紹介を兼ねてお話ししたいと思います。というのは、私の年代と生徒の皆さんの年代では、かなり年齢の違いはありますが、中学校・高校時代に考えたり悩んだりする問題の根本は、今も昔も余り変わらないのではと思うからです。また、皆さんと私では、カトリック系のミッションスクールで中学時代や高校時代を過ごしている（あるいは過ごした）という共通点もありますから、私の体験談も少しは皆さんの役に立つのではと思います。

では、最初に、聖書の言葉をお読みしますね。新約聖書の414ページ、ヘブライ人への手紙11章6節です。

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神が存在しておられること、また、神は御自分を求める者たちに報いてくださる方であることを、信じていなければならぬからです。」

この「信仰」というのは、「神様に信頼する」ということです。神様は、私たちが神様に信頼することを喜ばれる。そして、神様を求める者には答えてくださると書かれています。

さて、私は今ではこのように霊的講話や学校行事で聖書の言葉を引用して話などをしていますが、元々は私も私の家族も聖書やキリスト教とは全く縁のない人間であり家族でした。

私は、生まれて間もない頃から成人になるまで、広島県広島市で過ごしました。私の母はなかなか教育熱心で、その頃評判がよかったカトリック系の中高一貫の男子校に私を入学させたいと思いました。かなり後になってですが、私の母は当時を思い出しながら、「あの頃は『よい中学・高校に行かせて、よい大学に行かせれば、私の息子は幸せになれる』と単純に思い込んでいたのよねえ」とため息交じりに言っていました。私の方も、小学生の頃は大人しくて聞き分けの良い男の子でしたから、素直に母の勧めに従ってその中学校の入学試験を受け、入学することができました。ところが、入学早々、私は嫌というほど挫折感を味わうことになりました。小学校時代はそれほど勉強しなくても、クラスでも割とよい成績をとっていた私ですが、入学したその中学・高校はすでに進学校（大学への進学ですね）として評価を上げていた学校で、もっと成績優秀な男子が多く集まっており、私はあっという間に（いわゆる）落ちこぼれになってしまったのです。

「神」という絶対的な存在、絶対的な基準を知らないとき、人間は周囲の人間と自分を比較して自分の価値を判断しようとしがちです。その頃の私は、勉強でもスポーツでも、なかなか上位どころか平均にも届かなかったため、いつも周囲の友人と自分を比較しながら劣等感に

苛まれていました。また、自分の親や学校の先生と話をしている時でも、いつ答案用紙を見せろと言われるか、いつ成績について小言を言われるかと、いつも神経質になっていたように思います。

また、私は内向的で何事にも自信がもてない生徒でしたから、中学・高校時代までは大勢の人の前で話をしたり発表したりすることもほとんどなかったように思います。ですから、後で教師になり、そして校長になって、入学式や始業式などで何百人もの生徒や保護者の前で話をしている最中でも、ふと、「自分は何でこんなになったんだろう」と不思議に思うことがあります。人間というもの、変われば変わるものですね。

このようにお話しすると、まるで暗い思い出だけの中学・高校時代のように聞こえるかもしれませんが、その学校では良いこともありました。その一つが、否が応でも「神の存在」について考えさせられたことです。その男子校には様々な国の出身の神父様が十人近くもおられ、英語やその他の授業を担当されていました。また、週一回は「倫理」という授業（清心での「宗教」の授業と同じですね）があり、「神」そして「人間のあるべき姿」について、神父様の話を聞いたり討論したりする機会がありました。私たちの学年で「倫理」の時間を担当された神父様は日本人の方で、第二次大戦では海軍の将校になり、人間魚雷「回天」に搭乗して敵艦に突入するはずだったそうです。しかし、出撃の直前に終戦となり、その後、神様から授かった残りの人生をその神様に捧げようと、カトリックの聖職者（神父様）への道に進まれた方でした。その神父様は、元海軍の将校らしく、いつも毅然とした態度で、生徒の言葉や態度についても厳しく指導する方でしたが、真に生徒の為になることを教えようとしてくださった立派な方だったと思います。その神父様は、「倫理」の時間に、神の存在を信じることは非科学的なことでも非論理的なことでもない、神の存在はきちんと証明できると教えておられました。まだ中学生で純粋だった頃の私は「ふ〜ん、そうなのかなあ」と素直に受け入れていました。

しかし、高校生になる頃は、いわゆる反抗期で、それまで親や教師から受けてきた教えや考え方に対して批判的になり、神の存在についてもかなり懐疑的に考えるようになりました。これまで親や教師から教えられて当たり前と思っていたことを疑い、改めて自分なりに考え直してみようとするのも、一つの精神的な成長なのかもしれません。高校生になった私は、神父様の言うように神の存在は科学的に証明できると言うのはかなり無理があるのではないかと考え始めました。もし神が存在するとすれば、その神は無限であり時間も空間も超越している存在のはずだが、その神の存在を、限られた知性しかない有限の人間がどのように証明し、確信できるのか。人間の知性や理性では、神の存在は証明もできなければ否定もできないはずだ、と考えたのです。このような考え方を「不可知論」というのですが、その頃、尊敬し傾倒していた（のめり込んでいた）ダーウィンやハクスリーという著名な生物

学者も不可知論であったことを知り、「やはりそうか」と心強く思いました。高校時代の私はこのように考え、これで神やキリスト教については結論が出た、これで一件落着、と判断しました。もし、その状態が続けば、私は聖書ともキリスト教とも縁のない人生に戻り、高校の教師になることも、この清心に来ることもなく、そして皆さんにお会いすることもない、全く違った人生を歩んでいたことでしょう。

ところが、高校を卒業するころ、私の身近で想定外のことが起きてしまい、私は再び「神は本当に存在するのか、どうなのか」と真剣に考え悩むことになったのです。

でも、今日はもう時間がありません。この続きは来週、お話をさせていただきますね。

では、今週も、一緒に「主の祈り」を祈りましょう。

【主の祈り】

それでは、皆さん、今日も神様の祝福が豊かにありますように！